『元朝秘史』におけるテムジン・ウゲ

～テムジン・ウゲが勢力均衡論者でイェスゲイ・バアトゥルの戦略アドヴァイザーであったという仮説に基づいて～

Temüǰin_Öge in the *Secret History of the Mongols*：Based on a Hypothesis that Temüǰin_Öge was a Balance-of-Power-Theorist and Yisügei_Ba'atur's Strategic Adviser

藤井真湖

Mako Fujii

Abstract

Temüǰin_Öge（hereafter Öge） is historically believed to have been killed by Yisügei Ba'atur but may have been survived and become a strategic adviser under Yisügei Ba'atur (hereafter Yisügei) at the subtextual level of the narrative of the *Secret History of the Mongols*. The cornerstone of Öge's strategy seems to have been the balance of power theory. Therefore, he did not allow Yisügei to become kha'an "inside" and wage unnecessary wars "outside", which made his own group safer against other Mongolian groups and the mighty Chin(金). However, an unexpected situation occurred, Öge 's strategy broke down, and Yisügei was suddenly killed by the Tatars. Although Yisügei's premature death had already caused the first break with Chinggis, Öge continued to play an active role as Chinggis's "brain" after Yisügei's death. Gradually, Chinggis chose the opposite of Öge's theory of balance of power. Finally, the Anti-Chinggis alliance, secretly planned by Öge, confronted Chinggis and Ong-Khan, but were defeated.

キーワード

テムジン・ウゲ， イェスゲイ・バアトル， チンギス・カン，勢力均衡論

はじめに

13 世紀にユーラシア大陸を席巻したチンギス・カンはその幼名をテムジンとしていた。『元朝秘史』においては、その幼名がつけられたのは、チンギス・カンの父イェスゲイがタタル集団と戦って戻ってくるときに連れてきたテムジン・ウゲという人物に由来している[1]。チンギス・カンという名前は巻３§123 でカンに推戴される時点でつけられた名前であり、それ以前はテムジンと叙述されている。つまり、時期的にテムジンと呼ばれる人間は二人いたことになり、これを明確に区別するために、本論ではそれぞれ、まだ推戴以前であったとしてもチンギス・カンはチンギス、テムジン・ウゲのほうはウゲとだけ記載して区

別することにしたい。ウゲは『元朝秘史』（以下、秘史）の巻１§59 でにおいて 2 度言及されている人物である。ただ、そこにおいては、ウゲはタタルの人間としてイェスゲイと戦って敗北したことだけが書かれているだけで、この人物がイェスゲイのもとに連れてこられた後どうなったのかについての叙述は一切ない。しかし、チンギス・カンの幼名であるテムジンは、まさにこの人物にちなんでつけられた名前であったという明示的内容を見ると、この人物の重要性を示すに充分といえる。

筆者は、イェスゲイ陣営に来た後、この人物は戦略家としての実力を買われてイェスゲイの戦略アドヴァイザーとして重用されたのではないかと推測している。この人物が秘史の明示的なレベルで隠された理由は、この人物がタタル出身であったことと深く関係していると考える。秘史の明示的レベルではタタル集団はチンギス一族にとっての不倶戴天の敵集団として位置づけられているからであり、その不倶戴天の敵を戦略アドヴァイザーに登用するというのは秘史の表向きの趣向とは真っ向から反するものとなっているからである。ただし、ウゲの存在が隠された理由には明示的理由よりももっと重要な非明示的な意味がある。本論においてはこれについて考察することになる。

１．本論の目的と議論の流れ

１．１　本論の目的

本論ではウゲが戦略アドヴァイザーとして存在していたという仮説を提起するための下作業として、いわゆるボルテ事件とブリ・ボコ事件という２つの事件を比較することを通して、ボルテ事件においてはチンギス陣営に誰か戦略アドヴァイザーがいたのではないかという仮説を提起することを目的とする。ここでいうところのボルテ事件とは、チンギス・カンがメルキト集団に奪われた妻ボルテをケレイト集団の王罕とジャジラアト集団のジャムカの助けを借りて取り戻した一連の出来事から構成されている事件のことを指す。一方、ブリ・ボコ事件というのは、チンギス陣営がジャムカ陣営とダラン・バルジュトでの戦い（いわゆる十三翼の戦い）の後、チンギス陣営にジャムカ陣営から多くの人々が合流してきたことを祝して行なった宴会でブリ・ボコという人物がチンギスの異母兄弟ベルグテイの肩を切りつけた事件、及び、後にブリ・ボコがベルグテイに殺害された事件とを合わせて指すことにする。いずれの事件にしても、この命名は便宜的なものである。

重要なのは、この２つの事件は一見したところ無関係な事件であるものの、大いに関係していることである。以下の議論を先取りしておくと、前者のボルテ事件では戦略アドヴァイザーがいて背後で戦略を練ってチンギスがその戦略に従って動いていたのに対して、後者のブリ・ボコ事件ではそうしたアドヴァイザーはすでにいなかったことを示す。そして、この戦略アドヴァイザーが、チンギス陣営が金朝軍とともにタタル集団を挟み撃ちにした出来事を境として消失していると考えられることから、この戦略アドヴァイザーがタタルと関係している可能性を述べる。この観点から、この戦略アドヴァイザーをタタル出身のテムジン・ウゲに措定する妥当性を述べる。つまり、本論の第一の目的はチンギス陣営における戦略アドヴァイザーとしてウゲがいたという仮説の妥当性の検証である。

本論における第二の目的は、ウゲがイェスゲイ―チンギス父子の戦略アドヴァイザーとして勢力均衡論の立場から活躍していたという仮説の検証である。これを論じる際に、イェスゲイ時代とチンギス時代におけるウゲの戦略アドヴァイザーとしての活躍の痕跡をたどる。そのうえで、チンギスとウゲとは、「対外」政策や「対内」政策において真っ向から衝突した結果、最終的に決裂したことを指摘する。この決裂

の結果、ウゲが巻４§141 で述べられている反チンギス同盟の結成に尽力し、最終的に敗北したという流れをとらえることになる。

１．２　議論の流れ

以上の目的を遂行するため、本論では次のような流れで考察をおこなう。まず、１．３においては本論における対象文献、１．４では方法論に触れておく。続く第２章においては、ウゲが戦略アドヴァイザーとして存在していたという痕跡を浮かび上がらせるために、この人物が関与していたと考えられるボルテ事件における緻密な戦略の様相と、ウゲが関わっていなかったと考えられるブリ・ボコ事件の緻密とは言い難い事件の様相とを対比する。具体的には、まずは２．１でボルテ事件の非明示的内容を振り返り、次に２．２でブリ・ボコ事件の非明示的内容を振り返る。２．３ではボルテ事件とブリ・ボコ事件を総括して、前者にはウゲという戦略アドヴァイザーがいたのに対して、後者にはウゲが不在であった可能性を指摘する。続く３．においてはウゲに焦点を当てるが、まず３．１においてはイェスゲイ時代に彼がどのような戦略を持って助言していたのかを論じる。そして、イェスゲイはウゲの戦略スキームの中で動いていたものの、彼らに不測の事態が起こり、イェスゲイが横死することになった経緯を辿る。続く３．２においては、チンギスとウゲの間の亀裂はイェスゲイの横死事件の際に既に生じていたものの、イェスゲイの死後にウゲはチンギスの戦略アドヴァイザーを引き継ぎ、ボルテ事件を画策した可能性を示す。しかし、彼らの関係は、その後、「対外」政策や「対内」政策をめぐり修復不可能なものになったことを詳述する。そして３．３においては、ウゲがチンギスと決定的に決裂した後に反チンギス同盟を画策した可能性を論ずる。最終章の４．においては、本論を振り返り、ウゲが敗北した後には、モンゴル高原は勢力が均衡している遊牧諸集団の割拠する空間ではなく、チンギス陣営によって統一された空間に変貌していくことになったことを指摘する。なお、本論で対象としている箇所は史実とは異なる部分が幾つか観察されるため、上記の反チンギス同盟についての史実との関連を【補遺】で補う。

１．３ 対象文献

四部叢刊本の続集二巻を含めた計十二巻を便宜上「ひとつの作品」とみなし、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、敢えて連続体のものとして扱うということである。筆者の秘史研究においては、原文の音訳漢字をローマ字転写するさいには、四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』(2001 年）に依拠している。訳語に関しては、小沢重男の『元朝秘史全釈』3 巻と『元朝秘史全釈続攷』3 巻（1984～1989 年）及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997 年）を参照にした。

１．４　方法論

テキスト読解の方法論は、フランスの構造・記号学者ロラン・バルト（Roland　Barthes）が「物語の構造分析序説」で示した構造分析枠組みにもとづいている（ロラン・バルト 1979〔1977〕: 1－54）[2]。この方法論は、歴史学における方法論とは異質なものである。歴史学においては言語を現実に生起した事象を反映しているとみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、 言語は現実の反映でなく“言語＝世界”いう見方を採る。言語観のこうした差異は当然ながら秘史の読解に多くの差

異を生み出すことになる。

本論は秘史の叙述がどのような論理で構成されているのかを探求するものであるが、本論の方法論に基づくと、書かれていないことは存在しないことになる。その観点からみると叙述と叙述をつなぐ論理は複数存在しうることになる。とはいえ、一連の関連箇所において妥当な論理的な流れを成立させるための仮説を立てることはできる。問題になるのは、一連の関連箇所においての仮説が妥当だとしても、それが真に妥当性を持ちうるのかはまた別の問題だということである。それゆえ、ある特定の範囲で整合性を持つ仮説が他の箇所においても整合的に組み込まれうることを積み重ねていくことによって、個々の仮説の総体的な妥当性を高めていくという方法を採っている。そのようなわけで、本論でも、過去の拙論との整合性がとられるような形で考察が進められている。

2. ボルテ事件とブリ・ボコ事件の概要

2.1　ボルテ事件のもっている明示的意味と非明示的意味

本論でボルテ事件と呼んでいるのは、トクトア・ベキ率いる三メルキト集団がかつてトクトアの弟チレドからホエルンをイェスゲイに奪われた報復としてチンギスの妻ボルテを略奪した事件と、ボルテ奪還を目指して結成されたケレイトの王罕軍とジャムカ軍とチンギス軍の３軍がボルテをメルキトから奪い返した事件とを合わせて指した事件のことである。ボルテ事件については既に拙論で議論したので（藤井 2014ｂ）、ここではその概要だけを述べるに留めておく。ボルテ事件には明示的に示されている内容だけではなく、非明示的な内容が存在している。非明示的なレベルの内容は、明示的なレベルの内容とは対照的なものとなっている。両者の内容を個人や集団のレベルで対比してみると図１のようになる。

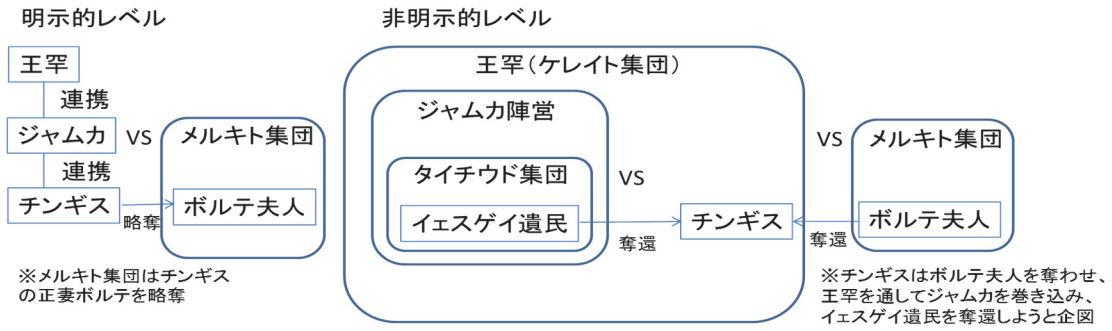

図１　ボルテ事件における明示的レベル（左）及び非明示的レベル（右）における人物／集団間関係

非明示的レベルにおいては、ボルテ事件が起こったとき、チンギスの継承すべきであったイェスゲイ遺民がタイチウド集団を通してジャムカに帰属しているような状態にあった。そして、ジャムカ自身はケレイト集団の王罕に緩やかに帰属していたと考えられる。ボルテ事件というのは、最終的にジャムカに属すようになったイェスゲイ遺民をジャムカから取り戻すために、ジャムカと王罕を巻き込むために画策された事件であったと考えられる。つまり、ボルテ事件には、明示的に示されたボルテの略奪事件とは異なる、イェスゲイ遺民の帰属問題が背後にあり、その帰属問題を解決するために画策されたという非明示的な意味がある。明示的なレベルは狭義のボルテ事件、非明示的なレベルは広義のボルテ事件と言い換えることもできる。

非明示的なレベルの広義のボルテ事件では、実は表１のような一連の“略奪”と“奪還”のモチーフを持つ出来事が順に連なっていたことが観察される。

表１：秘史巻２§72 から巻３§120 における６つの“略奪”と“奪還”

	“略奪”と“奪還”の出来事	該当箇所
A の略奪部分	イェスゲイ遺民の“略奪”（イェスゲイの死後その民がタイチウド集団と移動） ↓ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（表１の最下段を参照）	§72
B	ベクテルとベルグテイによる魚の“略奪” ↓（援助者：カサル） チンギスによる未来の魚の“奪還”（ベクテルの殺害）	§76 （§77） §77
C	タイチウドによるチンギスの“略奪”（タイチウドによるチンギス拉致） ↓（援助者：ソルカン・シラとその息子たち） チンギスによるタイチウドからの自身の“奪還”（無事逃亡して帰宅）	§79 （§82～§87） §88
D	チンギス家の８頭の馬の“略奪” ↓（援助者：ボオルチュ） ８頭の馬の“奪還”	§90 （§90） §90～§91
E	ジェルメの“略奪”（ジャルチウダイ老人が幼いという理由で連れ帰ったと説明） ↓（援助者：ジェルメの父ジャルチウダイ老人） ジェルメの“奪還”（ジャルチウダイ老人がジェルメをチンギスのもとに連れてくる）	§97 （§97） §97
F	メルキトによるボルテの“略奪” ↓（援助者：王罕とジャムカ） チンギスのメルキトからのボルテの“奪還”	§101 （§104～§109） §110
Aの奪還部分	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（表１の最上段を参照） **↓（援助者：ボルテ夫人）** **“略奪”された民の“奪還”（ジャムカ陣営からの人々の移動）**	 （§118？） §120

詳細は拙論に譲るが（藤井　2014b）、指摘すべきことは、狭義のボルテ事件が、イェスゲイ遺民が略奪された叙述（§72）と、そのイェスゲイ遺民がチンギスに取り戻されたという叙述（§120）の間に挟まっているだけでなく、この 2 つの叙述のあいだに、ボルテ事件以外にも略奪と奪還が一対となった叙述が複数観察されることである（表１参照）。具体的にいえば、イェスゲイ配下にあった人々がタイチウド集団に従って移動しジャムカ陣営に入った§72 から、略奪された民を奪還したという内容―ジャムカ陣営からの人々のチンギス陣営への移動という意味になる―が述べられる§120 までのあいだには、ボルテの略奪と奪還やイェスゲイ遺民の略奪と奪還を含め、計５つの略奪と奪還の叙述が織り込まれている（表１のB、C、D、E、F）。

とくに重要なことは、王罕とジャムカという 2 人の援助者を入れないと、チンギスはジャムカ陣営に吸収されたイェスゲイ遺民を取り戻せなかったといえることである。そうであるならば、王罕とジャムカ

に「助けてもらう」契機となったボルテ事件は欠かせないものとなる。そのようなわけで、属民を奪回するためにボルテが奪われる必要があったとするならば、ボルテは奪われたのではなく、敢えて奪わせた事件だという仮説が生まれてくる[3]。つまり、繰り返される“略奪”と“奪還”のエピソードがボルテ事件を頂点として、チンギスによるイェスゲイ遺民の奪還に収斂しているという緊密な構成をみると、ボルテ事件だけが偶発的に起こったとは考えにくいのである。そのようなわけで、ボルテ事件におけるボルテの役割は、明示的レベルと非明示的レベルとでは全く異なるものとなる。すなわち、明示的レベルでボルテは“被害者”であるのに対し、非明示的なレベルにおいてはチンギスの“援助者”となる（表 1 の最後の A の奪還部分を参照）。ボルテが“援助者”となっている理由は、ボルテは自身が犠牲になることによって、チンギスがイェスゲイ遺民をジャムカから奪還するために貢献したといえるからである。

２．２　ブリ・ボコ事件

ブリ・ボコというのは、チンギス陣営がジュルキン集団と宴会をしたさいにジュルキン集団の宴会役として登場している人物で、実はこの人物については秘史のかなり早い段階でチンギスの異母兄弟ベルグテイの肩を切りつけた人物として言及されている（巻 1 の § 50）。チンギスの異母兄弟ベルグデイの肩を切り付けるという事件を起こした事件は巻 4 の § 131 で詳細に叙述されており、この事件はブリ・ボコ事件の前半部分と言える。ブリ・ボコ事件の後半部分は、この人物が後日、ベルグテイと相撲をしたさいにベルグテイに背骨を折られて殺害されるという内容である。このように、この前半と後半を合わせて、ブリ・ボコ事件と本論では呼ぶことにする。ブリ・ボコとチンギスの関係がどうであったかというと、明示的なレベルでブリ・ボコはチンギスの敵となっているものの、非明示的にはブリ・ボコはチンギスのジュルキン集団へ送り込んでいた諜報者である可能性が濃厚である。これについての詳細な考察は拙論に譲るとして（藤井　2016）、明示的レベルにおける個人や集団の関係性は、非明示的レベルにおけるそれと対照的なものになっている。それを整理すると図 2 となる。

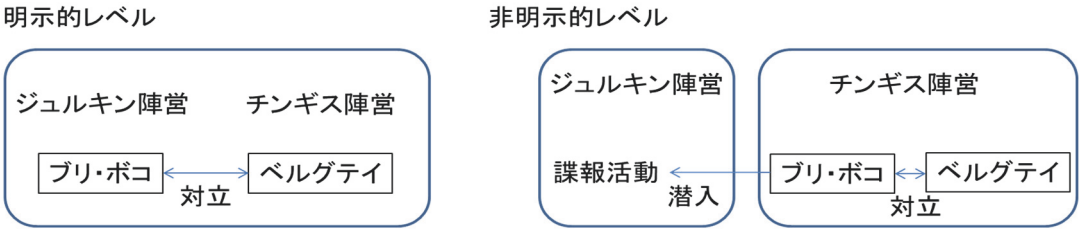

図 2　ブリ・ボコをめぐる明示的レベル（左）及び非明示的レベル（右）の人物／集団間関係

図 2 に示したように、明示的には、ブリ・ボコはチンギスの異母兄弟であるベルグテイと対立関係になっており、チンギスはブリ・ボコに傷づけられたベルグテイの味方になっている。しかし非明示的には、チンギスはブリ・ボコを味方につけており、宴会で意図的にベルグテイを切りつけるように指示していたと考えられる。チンギスがこのような画策をした背景には、宴会の最中に金朝から使者が到着して対タタル戦に参戦するようにという要請があり、チンギスがこれに応じたことが関係している。金朝からのこの要請は明示的には宴会の途中で来たように記されているが、おそらく事前にその要請は来ていたものと

推測される。なぜなら、チンギスはこの金朝からの要請にジュルキン集団が従わないだろうことを予期しており、その従わない理由が正当なものであることも理解していたと考えられるからである。というのも、チンギス陣営にとってタタル集団は明示的に敵であったとしても、金朝はタタル集団以上にさらに敵であったからである。実は、この宴会を開いた当時、明示的に理解されているチンギス陣営像と非明示的に理解されるそれとは対照的なものになっていた（図３参照）[4]。

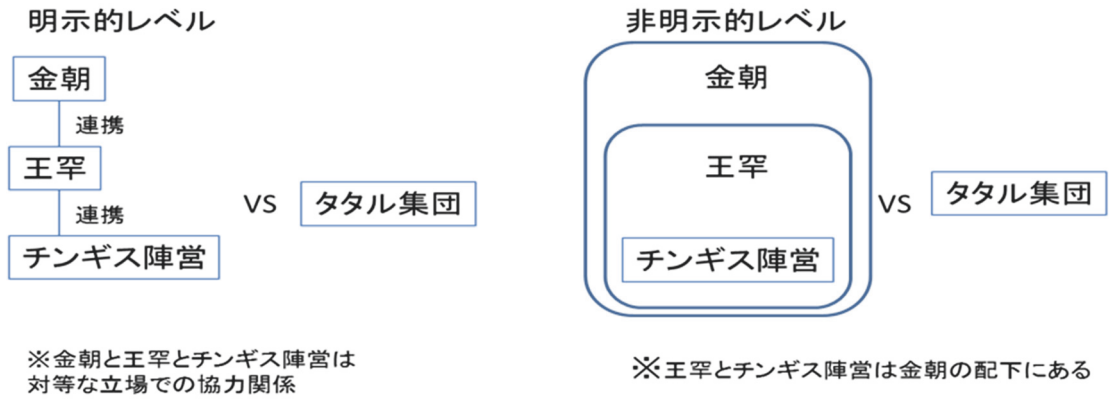

図３：対タタル戦における明示的レベル（左）及び非明示的レベル（右）における人物／集団間関係

明示的には、チンギスはこの金朝の要請に応えて王罕も引きずり込み、三者が連合してタタル集団を攻撃したように描かれている。しかし非明示的レベルでは、チンギスはこの金朝から要請がきた時点では、王罕と共に金朝の支配下に入っていたと考えられる。非明示的レベルでそのようなことが言える理由はどこにあるかというと、明示的に示された次の４つのことが同時に成立するためには、そう考えざるを得ない点にある。すなわち、①§129 におけるチンギスのジャムカに対する敗北の暗示[5]、②§130 の冒頭のチンギス陣営のジャムカ陣営に対する優位の表現の存在[6]、③同じく§130 におけるジャムカ陣営に負けたはずのチンギス陣営への諸集団の移動[7]、そして④§132 における、チンギスに対する突然の対タタル戦参加への金朝の要請とそれにチンギスが間髪を入れず従ったこと、という４つの内容である。

つまり、この４つの内容を成り立たせるためには、チンギス陣営が、ジャムカ陣営とのダラン・バルジュトでの戦いに負けた後、金朝の支配下に入ったということでしかないように思われる[8]。金朝の配下に入ったということは、金朝の庇護を受けられるということでもある。敗北した側のチンギス陣営に集団が移動している理由は、金朝という後ろ盾をチンギス陣営が得たことと関係があるものとみられる。チンギスが、本来なら敵である金朝の要請に応えたのは、実際には、金朝からの協力要請であったというよりも、命令であったということになる。この要請でタタル集団を攻撃した後、金朝のメグジン・セウルトが§134 でチンギスや王罕に称号を与えている叙述が見える。この叙述はチンギス陣営（当時は王罕＝チンギス連合陣営というべきかもしれない）が金朝支配下にあったことを傍証している。

２．３　ボルテ事件とブリ・ボコ事件の違い

以上、ボルテ事件とブリ・ボコ事件の非明示的なレベルにおける内容をそれぞれ振り返り、要点をまとめてみた。ここではさらに、両事件を別の視点から捉えなおしてみたい。まず表１で示した広義のボルテ

事件を構成する A〜F であるが、これらにはすべて当該集団の“財”－家畜や人間以外にも獲得した食料なども含む―を管理する者が当該集団のリーダーとなるという考え方が観察される。すなわち、B においては、魚の奪い合いという他愛ものない出来事に見せかけてはいるが、それは、魚という財をチンギス・カサル兄弟かベクテル・ベルグテイ兄弟のうちどちらの兄弟が管理するのかという問題をめぐる二組の兄弟間における確執であったと見る。この場合、チンギス・カサル兄弟がベクテルを殺害したことでリーダー格の兄弟となったことが示されている。続く C は、タイチウドという集団がチンギス・カサル兄弟のうちチンギスをリーダーと見なして拉致したという事件である。とはいえ、チンギスをリーダーと見なしたのはあくまでの「外部」の集団であり、「内部」のカサルやベルグテイが了解したわけではないので、三人の兄弟のうち誰が財を管理しリーダーになるのかという問題が残った。これを解決したのが D の事件である。ここにおいてはチンギス一家の 8 頭の馬が盗まれるという事件が起こり、この盗まれた馬を取り返すという財の管理を誰が行うのかということで、この三人の兄弟が競っている。そして最終的にチンギスがこの任務を遂行したことによって、内部的にもチンギスがリーダーとなった。そして、E においてウリヤンハイ集団のジェルメがチンギスのもとに連れて来られるが、これはチンギス一家で誰がリーダーになるかが決定した段階で連れて来られたことになる。

ここで指摘すべき点は、ボルテ事件が演出されたものだったという仮説に基づくなら、D の馬の盗難事件もまた演出された可能性が高いことである。なぜなら、ボルテ事件が画策されるのであれば、リーダーは当然チンギスでなければならないからであり、そのためには、この馬の窃盗事件を通してチンギスが兄弟の中のリーダーになっておく必要があったからである。ボオルチは秘史の叙述を見る限りお人好しであり、何よりも富裕な家庭の出身であった。ボオルチについての身辺調査はそれほど難しくはなかったであろう。ボオルチのチンギス陣営への引き入れは、来るべき事態に備えて馬群を確保するためであった可能性がある。そして、リーダーが 3 人の兄弟のうちチンギスとなった以降に、ジェルメが連れてこられた理由も、秘史では明示的に語られていないものの、チンギス陣営からの働きかけによる結果であった可能性が高い。なぜなら、ボルテ事件を画策する際に、チンギス一家には身を隠す場所が必要であり、ジェルメの父ジャルチウダイ老の住むブルカン山を必要としたからである[9]。そして、こうした B〜F の 5 つの出来事をすっぽりと包み込んで構成されているのが広義のボルテ事件であり、この広義のボルテ事件というのは、イェスゲイ遺民というチンギス一家で最も重要な財をめぐる闘争であったのである。以上のように、広義のボルテ事件は周到な準備が必要であった事件であることが理解される。

他方のブリ・ボコ事件はどうかというと、ブリ・ボコ事件にはこのような周到性は見られない。ブリ・ボコ事件で指摘すべきことは、ジュルキン集団が対タタル戦に参加しないことだけで彼らを責めることができなかったため、宴会での揉め事が必要になったということである。そして、この揉め事の内容は、①ジュルキン集団の后の序列を無視したチンギス側の酒の置き方に由来する諍い、②チンギス陣営の馬繋ぎ場から端綱を盗んだ盗人をめぐる諍い、③ジュルキン集団の后をチンギス側が彼らから奪ったり返したりという諍いである。②においてはチンギスの異母兄弟ベルグテイがジュルキンのブリ・ボコに肩を切りつけられるという事件が含まれている。このうち①と②については、チンギスが事前に指示していたからこそ揉め事が起こったと考えられる（藤井　2016）。明らかに、この宴会での揉め事はジュルキン集団の印象を悪くするためにチンギス陣営が行なった“小細工”だと考えられる。むろん、宴会中にベルクテ

イが負傷させられたり、最終的にブリ・ボコが殺害されたりしたことを見ると、“小細工”と表現するのは語弊があるかもしれない。それでも広義のボルテ事件が 4 万もの兵士を動員するスケールの事件であったことを考えると、ブリ・ボコ事件の“卑小さ”は否めないだろう（巻４§104）。

以上のように、ボルテ事件とブリ・ボコ事件は同じ人物が画策したにしては余りにもその構築度に違いがありすぎる。この二つの事件の違いは、前者の事件ではチンギスに戦略ブレーンがいたのに対し、後者のブリ・ボコ事件にはそのブレーンがいなくなっていたということを示唆していると筆者は考える。そして、本論では、前者のボルテ事件の戦略ブレーンとなったのが、イェスゲイが対タタル戦において連れて帰ってきたテムジン・ウゲという人物だと想定したい。その理由は、戦略アドヴァイザーの有無が、金朝と連携した、チンギス陣営の対タタル戦を境としているからである。このことは、この人物がタタル側に立つ人間であることを暗示している。この観点から考える場合、タタル出身者であり、かつ、チンギスの幼名になるほどの人物だったウゲが戦略アドヴァイザーの有力候補者として浮かび上がってくるのである。本論では、ウゲは、イェスゲイ陣営に吸収された後、勢力均衡論に基づくイェスゲイの戦略ブレーンとなったという仮説を提起することにしたい。

この仮説を提起した上で、改めて二つの事件を比較して重要な点を指摘しておきたい。それは、各々の事件における敵対的人物や集団に対する最終的な処理の仕方の違いである。まず、ボルテ事件においては最終的に目指されているのがイェスゲイ遺民をタイチウド集団から奪還することであり、メルキト集団と戦っているとはいえ、メルキト集団を完全に破壊するものではなかった点を強調しておきたい。しかも、実はこの奪還にしても、イェスゲイの死後散逸した属民をもう一度、再結集することに重点が置かれている。秘史の叙述をよく見るなら、このボルテ事件の後の、ボルテの「ジャムカは飽きっぽい人なので自分たちに飽きたのであろう」という一言が原因でチンギスとジャムカが離反することになった結果、チンギスが属民を「奪還した」と言える。そもそも、イェスゲイの存命中は、タイチウド集団はイェスゲイの集団と一緒にいたのであるから、このボルテ事件というのは、その状態に復帰させることが目的であったと解釈するのが妥当であろう[10]。

これに対して、ブリ・ボコ事件のほうは旧態への復帰ではなかった。すなわち、ブリ・ボコ事件においては、チンギス陣営がジュルキン集団（ブリ・ボコも広義に含んでおく）といういわば親戚集団を抹殺していることが観察されるのである。広義のボルテ事件の結末においてはジャムカへの制裁は一切なされていないのに対し、ブリ・ボコ事件の結末におけるブリ・ボコやジュルキン集団への制裁は苛烈すぎるものとなっている。この違いはまさにウゲとチンギスの考え方の違いに起因するものであると考える。以下、この仮説に沿って、イェスゲイ時代とチンギス時代におけるウゲの動向を探ってみたい。

3. テムジン・ウゲ

3. 1　イェスゲイ時代のテムジン・ウゲ

冒頭で既に言及したように、ウゲは秘史においては２度触れられるに過ぎない人物である。この人物は、イェスゲイが対タタル戦において連れてきた人物で、ちょうどこの時にチンギスが生誕したのでこの人物の名前にちなんで “テムジン” と名付けられたと秘史には叙述されている[11]。そして、チンギスが 9 歳の時にイェスゲイがチンギスを連れて妻の実家のオルクヌウト集団のもとにチンギスの妻を探しにいっ

ているわけなので、ウゲは約 10 年の間、戦略アドヴァイザーとしてイェスゲイに仕えていたという計算になる。

ウゲは不要な戦争を避けて勢力を温存する、勢力均衡論者であったと考えられる。そのように考えると、秘史においてはウゲが連れてこられた後、イェスゲイが対タタル戦争に関わったという叙述が見られないことは、符合している。対タタル戦を行わないことは現状維持を意味するからである。イェスゲイはウゲの実力を見込んでブレーンに据えていたと考えられるので、ウゲの方針を受け入れていたと考えられる。すなわち、“戦略的に何もしない”という方針である。とくに、イェスゲイがクトゥラの後継カアンになることをウゲが押しとどめていたと考えられることは重要である。なぜなら、後述するように、イェスゲイはクトゥラ・カアンの後釜になる野心を持っていたと考えられるからである。イェスゲイのこの野心の背景には、拙論で論じたように（藤井　2015）、クトゥラはタタル集団と密かに通じてアムバガイ殺害の手引きをしていた可能性が高いということがある。それゆえ、クトゥラはアムバガイ・カアンの死後、タタル集団と戦い続けるようにというアムバガイの遺言を果たすことができず、政権発足当時から既にレームダック状態に陥っていた。ちょうど時期的にはこの頃に、イェスゲイは対タタル戦でウゲを連れてきたことになる。勢力均衡論に立つウゲはイェスゲイに次のように進言していたと考えられる。それは、弱体化するクトゥラ政権を敢えて温存させておくことが、クトゥラへの優位性を保ちつつ、且つ、他の勇者たちに警戒感を抱かせないという点で、モンゴル内部での賢明な政治的振る舞いだということである。イェスゲイはなろうと思えばクトゥラの後継者となりえた可能性は大いにあったであろう。

その理由は、イェスゲイがケレイト集団の王罕とアンダ（盟友）関係になったことにある。拙論で論じたように、アンダとは勢力が拮抗した際に一時的な休戦を約束する紳士的協定であったとみなせる（藤井 2014a）。イェスゲイはもともとケレイトの王罕の配下的な存在であったが、次第に王罕を凌駕するようになり、その結果、アンダ関係を結ぶに至るのである。イェスゲイは、ケレイトの王罕を滅ぼしうるほど両者の力が拮抗していたにも関わらず、イェスゲイは王罕を倒す手前の段階で踏みとどまっていた。アンダ関係というのは、勝敗を決さない“保留”という状態を指した関係であるので、ウゲの勢力均衡論と呼応する考え方である。すなわち、イェスゲイがケレイト集団を滅ぼしえたけれども滅ぼさなかった背景には、ウゲの戦略アドヴァイザーとしての思惑が関係していたと見る。

以上をまとめると、条件が満たされていたと考えられるにもかかわらずイェスゲイのカアン位への野心が成就されていないことや、ケレイトの王罕とアンダ関係を維持していたことの背景には、ウゲの意向が働いていたということになる。

ところで、ウゲはイェスゲイ時代に対タタル関係に関して、単に何もしなかったかというと、そうではない。戦闘と婚姻は英雄叙事詩の二大モチーフであるが、ウゲは対タタルについては、戦闘ではなく、婚姻の面からイェスゲイに手を打たせようとしていた。具体的に言うと、イェスゲイが息子チンギスを連れて、イェスゲイの妻ホエルンの実家であるオルクヌウト集団のもとに赴こうとしていたのは、ウゲの進言によるものであった可能性が高いと考える。この議論を理解するさいには拙論において述べたことをおさらいしておく必要がある。

それは、イェスゲイがかつてメルキト集団からホエルンを奪って正妻とし、もともと娶っていたタタル出身の妻“ベルグテイの母”を正妻から降格させたことである（藤井　2010，2011a）。イェスゲイがなぜそのようなことをしたかというと、クトゥラ・カアンの後釜になろうという野心があったため、タタル集

団を敵とする必要があったためであった。そして、当時、イェスゲイの正妻はタタル出身であったため、正妻がタタルである限り、タタル集団と正面切って戦うことができないため、タタル出身の正妻を降格させる必要があった。しかし当然ながら、これは社会的な婚姻秩序に抵触する行為であった。

そこで、この事件から10年以上経った頃に、息子テムジンにホエルンの実家から嫁を娶れば姻戚の「伝統」ができると考え、ウゲはイェスゲイに進言し、イェスゲイの息子とオルクヌウト集団の娘との縁談をまとめるためにイェスゲイをオルクヌウトに出発させたのではないかと考える。これが平和的な行為であることの徴として、ウゲはイェスゲイに息子チンギスだけを同行させ、他の従者を連れないように進言したのであろう。しかし、オルクヌウト集団のところへ行く途中に、ウゲにも、ましてやイェスゲイにも、予期しえぬことが起きた。それはコンギラト集団のデイ・セチェンが突如現われたことである。イェスゲイはデイ・セチェンに導かれるままに彼の家に行き、その娘ボルテを見て気に入り、そのままボルテを息子の伴侶にする決断をしてしまう。拙稿で論じたように、デイ・セチェンはオルクヌウト集団からイェスゲイの来訪について事前に相談をもちかけられていた可能性がある。そうでなければデイ・セチェンが余りにもタイミングよくイェスゲイ父子の前に突如現れるというようなことは起きなかったであろう。拙論で論じたように（藤井　2021）、デイ・セチェンはタタル集団と謀り、イェスゲイを殺害した黒幕であった。イェスゲイがいつ何時正妻を降格させるような振る舞いをするかわからない信用ならない人物であるという点で、タタル集団とオルクヌウトーコンギラト同族集団はイェスゲイに対して共闘できる姻族の立場にあった。

ウゲは10年―チンギスが数えで9歳の時の出来事なのでーも経てば、イェスゲイの過去に犯した婚姻秩序に対する倫理的違反への反感は緩和されているものであろうと想像していたと考えられる。しかし背後にオルクヌウト集団の存在が見え隠れするデイ・セチェンの動きを見ると、姻族の不信を払拭するのに10年の歳月では足りなかったことが示されている。これはウゲの最大の誤算であったといえる。つまり、ウゲが敢えて無防備にも幼い息子だけを連れてイェスゲイをオルクヌウト集団へ行かせていたことは、最終的に仇となった。ウゲの立場から見ると、イェスゲイを死に至らしめたのはデイ・セチェンだという気持ちがあったと考えられる。そのような気持ちがあったからこそ、ウゲはイェスゲイの死後、タイチウド集団を通じてジャムカ陣営に流れたイェスゲイ遺民を取り戻す際に、デイ・セチェンの娘ボルテを道具として用いたのであろう。このやり方は、ウゲのデイ・セチェンへの意趣返しという意味を持ちうる。つまり、父親の罪を娘で償わせるという意趣返しである。

イェスゲイの死の経緯とボルテ事件は明示的には全く関連のない出来事であるが、イェスゲイの死にボルテの実父デイ・セチェンが関わっていたと考えると、非明示的レベルで 2 つの出来事は密接に関わっていることが理解される。興味深いのは、デイ・セチェンもウゲもどちらも彼らの動きが明示的には追えないことである。すなわち、表向き、イェスゲイの死にはボルテの父デイ・セチェンは全く無関係なように見えるだけでなく、ボルテ事件においてもウゲは全く無関係なように見える。というより、ウゲの場合、ウゲの存在の痕跡すら明示的にたどることができない。にもかかわらず、イェスゲイ横死事件とボルテ事件の非明示的レベルにおいては、デイ・セチェンとウゲの両者の間には暗闘が繰り広げられていたと考えられるのである。正妻として迎えたボルテを敢えて敵陣に奪わせるわけであるから、ウゲがチンギスに計画の遂行前に閨房における振る舞いの要諦を指南していたことは想像に難くない。つまり、ボルテ事件がウゲという黒幕によって画策されたものであるとするならば、チンギスの長子ジョチは次子チャガ

タイにメルキトの種と疑われていたものの、チンギスとボルテの実子であったと考えるのが順当である。

３．２　チンギス・カン時代のテムジン・ウゲ

３．２．１　ボルテ事件の黒幕として

すでに先取りして議論した部分も多いが、ウゲはもともとイェスゲイが見込んで戦略アドヴァイザーに起用したと考えられる人物であり、チンギスが起用した人物ではない。しかし、予期せぬイェスゲイの死は、イェスゲイの傘下にいた多くの人々がタイチウド集団を通して、ジャムカ陣営に移動してしまう事態を引き起こしてしまった。そもそも、イェスゲイが毒殺されなければ、属民が散逸してしまう事態も起きなかったわけであるから、その責任がウゲに負わせられた可能性は高いであろう。ウゲはイェスゲイが横死してしまった責任を引き受けて、ボルテ事件を画策したものと考えられる。

ウゲは婚姻秩序を破壊すると 10 年経ても不信感を払拭しえない事態を重く見てーただしイェスゲイがホエルンを略奪した当時、ウゲはイェスゲイ陣営にはいなかったー、いかなる状況においても婚姻秩序を破壊しないことを決意した。すなわち、ウゲはイェスゲイを殺した人物の娘であってもチンギスに妻として迎えさせて、イェスゲイが結んだ婚姻契約を履行させた。デイ・セチェンは、チンギスの父イェスゲイ殺害に加わったわけであるから、よもや後年、チンギスが自分の娘を妻として迎えるために自分のもとを訪れるなどということは想定していなかった。この詳細については拙稿に譲るが（藤井　2021）、デイ・セチェンは狼狽しつつも、チンギスに娘ボルテを妻として与えざるをえない状況になった。ここにおいては、イェスゲイの横死事件でデイ・セチェンに横やりを入れられたウゲがボルテとの結婚を誠実に履行させてデイ・セチェンに一泡喰わせただけでなく、ボルテ事件においてはイェスゲイ遺民を取り戻すために、ボルテを道具として使って、メルキト集団にあえて奪わせるという演出を画策した。この点に着目すると、ウゲがデイ・セチェンを一枚も二枚も上回っていることが観察される。

ウゲの手腕がいかに傑出していたかというのは、イェスゲイの死後、イェスゲイ遺民がタイチウド集団を経由してジャムカ陣営に流れた後、イェスゲイ遺民を取り戻すために使える切り札がチンギス一家にどれほどあったかを考え合わせると明らかである。そのようなチンギス一家の逆境を逆転させるため、ウゲはチンギスにボルテをあえてメルキト集団に奪わせるという離れ業をやってのけさせたのであった。

２．１のボルテ事件で振り返ったように、ボルテ事件は一連の“略奪”と“奪回”の諸事件の頂点にあるだけでなく、このボルテ事件を含む一連の諸事件がひとつひとつずつ丹念に積み重ねられていってはじめてイェスゲイ遺民を奪回することに成功できたわけであるから、ウゲの戦略アドヴァイザーとしての腕は確かなものであったとみることができる。イェスゲイがウゲを起用した理由はむしろこうした事件をたどることによって逆に推測されるものとなる。実際、巻 2 § 74 に叙述されている、イェスゲイ亡き後のホエルンの奮闘ぶりを見ると、イェスゲイ亡き後のホエルン一家は赤貧状態にあったと考えられる。ただし、ウゲの肯定的評価というのは、男性の暴力に抗えない女性を手段に使うという発想の冷酷さへの批判を度外視する限りであることは論を俟たない。

３．２．２　チンギスとテムジン・ウゲの亀裂

３．２．２．１　チンギスとウゲにおけるジャムカに対する考え方の違い

イェスゲイの横死事件の責任を考えても、あるいは、ボルテ事件において覚悟されなければならなかっ

た、ボルテがメルキトに凌辱されるリスクを考えても、チンギスとウゲの関係が良好であったとは考えにくい。実際、チンギスはウゲの意向とは逆の行動をするようになっていった可能性が高い。というのは、イェスゲイの遺民をジャムカから取り戻すとはいえ、ウゲが仕立てたのはジャムカ陣営とチンギス陣営が再合流するところまでであり、チンギス陣営がジャムカ陣営と袂を分かつというのはウゲの戦略にはなかったと考えられるからである。ウゲは、イェスゲイ時代における戦略と同様に勢力均衡論者であり、彼の考えるところではジャムカ陣営とチンギス陣営は分かれる必要はなかった。イェスゲイ遺民は共有財産として置いておけばよかったのであり、どちらかが所有するということになるから争いが起きるのである。実際、ボルテがメルキト集団から取り戻された後、巻３§118 の冒頭部分で叙述されているように、チンギスはジャムカとおよそ 1 年半の間、行動を共にしているところからみて、少なくともこの期間、チンギスはウゲの意向通りにジャムカと平和裏に過ごしていた。

しかし、ジャムカの「謎の」一言を離反の意と解したボルテの判断で（同巻§118）[12]、チンギスはジャムカと袂を分かつ。これが契機となり、チンギス陣営がチンギス―ジャムカ連合陣営から離脱することで、結果的にチンギス陣営とジャムカ陣営が対立的な関係に移行していく。むろん、ウゲは勢力均衡論に立っているので、この事態を歓迎したわけではなかったと推測される。ところで、チンギス＝ジャムカ陣営が分裂したとき、タイチウド集団は明示的レベルにおいても、ジャムカ陣営に移動したことが語られているが（巻３§119）、多くの集団はチンギス陣営のほうに流れたことが記されている（同巻§120）。これまでの議論に基づくならば、この§120 でチンギス陣営に動いた複数の集団は、チンギスの実力を買ってチンギス陣営についたというよりも、ウゲという戦略アドヴァイザーの実力を買って、ウゲのいるチンギス陣営に流れたと考えるほうが妥当であろう。

ところで、この流れにおいてウゲには予期せぬことが生じたといえる。なぜなら、この§120 の最後にメネン・バアリン集団のコルチ・ウスンという人物も一族を引き連れてチンギス陣営に移動しているのであるが、この人物はさらに§121 でチンギスとジャムカの陣営の対立をあおるような託宣を述べ、両者の対立の構図を加速させたと言えるからである。そして、このコルチ・ウスンの託宣で、草原の勇者たちは選択を迫られ、続く§122 においては、クトゥラ・カアンの息子アルタンや、ジュルキン集団のソルカト・ユルキの息子であるサチャ・ベキ、タイチュがチンギス陣営に入っている。すなわちコルチの発言がきっかけでチンギスに近い系譜集団の主要な人々がチンギス陣営に移動するという事態が生じたのである。このコルチ・ウスンの神託―次のカンはジャムカかチンギスという信託―がなされた後に、チンギス陣営に移動してきた上記のアルタンやサチャ・ベキ、タイチュはまるでコルチ・ウスンの後を追ってチンギス陣営に来たかのようにみえる。しかしコルチ・ウスンはウゲの実力を頼ってチンギス陣営に来たわけである。それゆえ、コルチ・ウスンは狡猾にもウゲの実績にただ乗りしてチンギス陣営にさらなる集団を誘ったといえる。

そして§122 におけるアルタンやサチャ・ベキ、タイチュのチンギス陣営への合流の帰結は、続く§123 におけるチンギスのカン（＝カアン）への推戴につながっている。ウゲは、草原の秩序をいたずらに乱すことを回避させるために、イェスゲイを敢えてカアンにさせなかったわけであるので、チンギスがカアンになるということは、ウゲの意思に反したはずである。ボルテ事件でボルテを奪い返した時点でチンギスには特別な実績が何もなかったわけであるから、なおさらである。というわけで、チンギスが幼名テムジンという名前をチンギス・カンと変えるのは、単なる名前の変更ではなく、非明示的には、チンギスがウ

ゲとは異なる生き方をしていくことを意味していたといえる。

その後、前述のように、いわゆるチンギス陣営とジャムカ陣営が衝突して戦ったいわゆる 13 翼の戦いにおいては（巻４§129）、チンギス陣営は敗北したものの、決定的に敗北する前に金朝の支配下に入った可能性が高い。ところで、ウゲは、チンギス陣営がジャムカ陣営に敗北した際、どのような考えでいたのか。この場合、ウゲにとっては、敗北してジャムカ陣営に入るほうがよいと考えていたのではないかと推測する。前述のように、ボルテ事件でイェスゲイ遺民を取り戻したとはいえ、実際には分かれていた属民が再合流したところで決着していることを見ても、後述するように、ウゲが後にジャムカを諸集団のリーダーとして担ぎ上げていることを見ても（巻４§141）、ウゲ自身は金朝の庇護下ではなく、ジャムカ陣営に吸収されることを良しとした可能性が高い。だが、チンギスはそれを許さなかったであろう。チンギスが許さなかった理由は明白で、妻ボルテをメルキト集団に奪わせるという犠牲を払ってようやくイェスゲイ遺民をジャムカからもう一度自分のところに再合流させることができたのに、ジャムカ陣営に降ることはありえないという考えであったことは容易に想像がつく。そのようなわけで、チンギス陣営の戦略ブレーンであるウゲは否応なく金朝の支配下に入らざるを得なくなったと推測される。

ただし、ウゲにとって、金朝支配下に入ることはあくまで一時的な緊急避難であって、チンギス陣営がそのまま金朝の手先として動くということは考えていなかったであろう。なぜなら、そもそもウゲの勢力均衡論というのは、強大な金朝の支配下に入らないための戦略であったはずだからである。それゆえ、ウゲにとって、金朝の指令に従って、チンギス陣営がタタル集団を金朝軍と挟み撃ちにするなど、言語道断のタブーの行動であった。しかし、秘史で叙述されているように、チンギスはこのタブーの軍事行動をおこなってしまったのである。これについては次の節で詳細に論じてみたい。

３．２．２．２　ウゲとチンギスの決定的決裂

前述したように、チンギスは、父イェスゲイがならなかったカアンになるという点で、集団の長となる道―クトゥラ・カアンの息子アルタンやジュルキン集団のサチャ・ベキらに担がれた結果であったとしても―を選んだ（巻３§123）。これにより、チンギスとジャムカは敵同士になった。誰かがカアンになることによって、これまで曖昧な関係にあった王になりえる候補者たちが並列しうる可能性はなくなり、その結果「内部」での権力闘争と粛清が始まることになった。

広義のボルテ事件においても、ウゲは、イェスゲイ遺民を取り戻す画策をしたが、ジャムカと決別してイェスゲイ遺民を奪い返すというよりも、チンギスとジャムカの双方のものでもあり、どちらのものでもないというような宙づり状態にしておくという考えでいたと思われる。ウゲは何よりも勢力均衡論者であったと考えられるからである。しかし、これはチンギスの望む状態ではなかった。チンギスはジャムカからすべてを奪い返し、カアンになることを望んだ。

こうしてウゲとチンギスの間の亀裂は段階的に徐々に大きくなっていったと考えられる。第一に、チンギスがジャムカと分離して敵対関係になったことであり、次に、チンギスがチンギス陣営でカアンとなったことであり、第三に、チンギスが金朝の支配下に入ったことであり、そして最後に、以下に論じる、チンギスが金朝からの要請を受けて、タタル集団を金朝と挟み撃ちにするという軍事行動を起こしたことである。最後の行動は決定的で、これを行なうことは、タタル集団を単に滅亡させることを意味しなかった。チンギス陣営がタタルを金朝と挟み撃ちにすれば、チンギス陣営と金朝の間の緩衝地帯がなくなるこ

とを意味するからである。つまり、タタル滅亡後、緩衝地域がなくなった分、チンギス陣営の勢力圏は金朝の勢力圏と接することになる。とすると、金朝はチンギス陣営の西側にある集団とチンギス陣営を滅ぼすという展開になってもおかしくはない。この場合、チンギス陣営は挟み撃ちに合わないためには西側の集団を滅ぼすしかない。

つまり、論理的に考えるならば、チンギス陣営は、金朝の支配から脱するためには、金朝と対抗しうる勢力となるために勢力を拡大するか、あるいは金朝を滅亡させる以外に、独立的な勢力を維持し続けることはできない。つまり、チンギス陣営は、金朝と拮抗できるような段階に至るまでは、金朝と西の集団に挟み撃ちに合わないようにするために、次々に西の勢力を滅ぼしていかなければならないメカニズムに陥る。つまり、金朝の要請に応えることは、チンギス陣営が果てしない戦争状態に突入していく回路に入ることを意味する。チンギスが生涯のほとんどすべてを戦場で費やすことになったのも、この路線上で考えると納得がいく。

チンギスの生涯というような視野で眺めると、チンギスとウゲとの間には、ボルテ事件が起こる前からも良好ではなかった可能性は高い。なぜなら、チンギスは同母弟カサルとともに、タタル出身と考えられる“ベルグテイの母”の息子ベクテルを殺害しているからである。これは、後年、チンギス陣営がタタル集団を金朝と挟み撃ちにする出来事の、家庭内での比喩的な先行ヴァージョンであったといえる。そして、このベクテル殺しの後に、チンギスはタイチウド集団に拉致されるわけであるから、この事件が集団秩序に波風を立てたことは明らかである。この事件はその後、ベルグテイの行動の仕方にもつながる波紋を引き起こしたことは拙論で論じたのでここで割愛するが（藤井　2011a）、金朝の要請でタタル集団を挟み撃ちにするというのは、ベクテル殺しの波紋どころではなく、モンゴル高原に割拠する諸集団に大きな激震を引き起こす発端の事件となりえた。つまり、チンギスがタタル集団を滅ぼすという政治的選択は、ウゲの考える勢力均衡に致命的な打撃を与えるものであった。そのことが実際に意味するのは、いつ終わるかわからない対外拡張戦争への突入だったからである。対外拡張戦争と同時に進行するのは、内部であるはずのジャムカ陣営が敵に化する＝外部化することであり、チンギスの意向に沿わないものをチンギス陣営において抹殺していく内部粛清である。タタル集団を金朝と挟み撃ちにする軍事行動の後、チンギスはこの戦争にチンギスに近い系譜集団であるジュルキン集団が参加しなかったことを根に持ち－非明示的なレベルにおいてはジュルキンが対タタル戦争に参加しないことはチンギスに織り込み済みであったのだが－、チンギスはジュルキン集団を抹殺している。このように、対外戦争と内部粛清は連動する関係となっている。ジュルキン集団の事例にみるように、どこからどこまでが“外部”となり、どこからどこまでが“内部”となるのかということは相互に連動しており、動態的なものだからである。

チンギスの眼中にはタタル集団しかなかったので、タタルは徹頭徹尾“敵”であり、抹殺すべき対象となっていた。後に、チンギスがタタル集団を降した際に、このタタル集団をどう処理するかを検討する軍法会議の決定を漏洩したベルグテイを二度と再び会議に出席させないようにしたという内容があるが（巻５§154）、チンギスのベルグテイへの怒りは、チンギスがベルグテイに対して、ベルグテイの母がタタル出身であったことと関連付けて、疑心暗鬼になっていたことを示している。ベルグテイへの不信感がタタル集団との血のつながりに起因していたのと同じように、チンギスは金朝とタタル集団を挟み撃ちにするという軍事行動に強く反対したと考えられるウゲに対して、ウゲがタタル出身者であることと関連付けてウゲの行動を理解した可能性が高いのではないかと推測する。

ただし、そもそもタタル集団をチンギス陣営の“敵”とみなす考え方は妥当ではないことに触れておきたい。イェスゲイが殺害された背景には、タタル集団よりもむしろ、コンギラト集団のデイ・セチェン－チンギスの妻ボルテの父－が裏で暗躍していた可能性が高く（藤井　2021）、かつてタタルのジュイン集団の手引きによって金朝で殺害されるはめになったアムバガイ・カアンにしても、その背後で暗躍していたのがアムバガイの後継者となったクトゥラであった可能性が高いからである（藤井　2015）。

むろん、ウゲが自らの出自を全く考慮に入れていなかったかどうかは不明である。しかし少なくとも物事を考える主軸が出自集団にあったとは考えにくい。上記に指摘してきたように、この人物がイェスゲイのブレーンとして活躍していたと考えられる以外に、何よりもウゲの理論的支柱は勢力均衡という考え方にあったと考えられるからである。この理論に基づけば、どの集団に所属していようと、「他の」集団とは決定打を与え合わず、互いに生き残ることが重要なのである。すなわち、どの集団も互いに相対的な存在なのである。そもそも勢力均衡とは生き残り戦略なのであって、出自というような自ら変えることのできない宿命的な集団にこだわることは生き残り戦略という観点から見て合理的ではなかったはずである。それゆえ、ウゲにとってタタル集団を温存させることは彼自身の出身集団へのこだわりというよりも、むしろウゲがイェスゲイ時代に引き続き所属していたチンギス陣営の生き残り戦略として合理的だと判断した結果だと考える。

それゆえ、チンギスが金朝の要請を受け入れた時点で、チンギスとウゲの間の亀裂は決定的なものとなったと考えられる。以上の「外」への対応についてのウゲとチンギスの考えの違いを表にすると、表２のようになる。

表２　ウゲとチンギスの「外」に対する対応の違い

	「外」に対する対応
ウゲ	勢力均衡 （ヒエラルキー不在）
チンギス	金朝とタタル集団を挟み撃ちすることを発端とする、チンギス陣営の他集団への優越 （ヒエラルキーの確立）

３．２．３　ウゲの反撃の顛末～巻４§141 の非明示的意味～

その後のウゲの行動は§141 における叙述の非明示的な内容に基づいて辿ることができる。当該節においては、草原の諸集団の領袖たちが反チンギス同盟を結成したと叙述されている。まず§141 の明示的な叙述がどうなっているのかを見てみよう（栗林均・确精扎布編　2001：184,186)。なお、左の数字、例えば 04：30：01 は四部叢刊本の巻４の 30 丁の 1 行目という意味である。

04:30:01　te’ün-ü qoyina takiya ǰil Qadagin Salǰi’ut

その後、酉の年に、①カタギン、サルヂウトが

04:30:02　qamtut=ču Qatagin-u　Baqu_Čorogi teri’üten Qadagin

共になり、カタギンのバグ・チョロギを頭とするカタギンと

04:30:03　Salǰi’ud-un Čirgidai_ba’atur teri’üten Dörben Tatar

サルヂウトのチルギダイ・バアトゥルを頭とする一団は、②ドルベン、タタル

04:30:04　-tur ǰokildu=ǰu Dörben-nü Qaǰi'un_beki teri'üten

に相和して、ドルベンのカヂウン・ベキを頭とする一団、

04:30:05　Tatar-un Alči_Tatar-un Jalin_Buqa teri'üten Ikires-ün

③タタルのアルチ、タタルのヂャリン・ブカを頭とする一団、イキレスの

04:30:06　Tüge_Maqa teri'üten Onggirad-un Dergek Emel

トゥゲ・マハを頭とする一団、オンギラトのデルゲグ、エメル、

04:30:07　Alqui+tan Qorolas-un Čonaq[Čoyoq] Čaqa'an teri'üten

アルクイ等、ゴロラスのチョナク・チャガアンを頭とする一団、

04:30:08　Naiman-ača Güčü'üt_Naiman-u Buyiruq_qan Merkid-ün

ナイマンからグチュウド・ナイマンのブイルグ・カン、メルキドの

04:30:09　Toqto'a_beki-yin kö'ün Qutu Oyirad-un Quduqa_beki

トクトア・ベキの子クトゥ、オイラトのクドゥガ・ベキ、

04:30:10　Tayyiči'üd-un Tarqutai_Kiriltuq Qodun_Örčeng

タイチウドのタルクタイ・キリルトゥグ、コドゥン・オルチャン、

04:31:01　A'uču_ba'atur+tan Tayyiči'ut edün qarin Alqui

アウチュ・バアトゥル等のタイチウド、これら諸部がアルクイ

04:31:02　_bula-a či'ul=ǰu Jaǰiradai Jamuqa-yi qa ergü=ye

泉に集って、「ジャヂラダン（ジャダラン）のジャムカを王に押そう」

04:31:03　ke'e=n aǰirqa ge'ün ke'üs čabčilaldu=ǰu

と言って、牡馬、牝馬を共に切り、

04:31:04　andaqaldu=ǰu tende-če Ergüne_müren huru'u newü=ǰü

盟約しあって、そこからエルグネ河を下り移って、

04:31:05　Kan_müren Ergüne-de čitqu=qu　šina'a-yin a'unu'u-da

ケン河がエルグネ河に注ぐ川洲の広い河曲において

04:31:06　Jamuqa-yi tende gür qa ergü-bei. …（略）…

ジャムカをそこに「普き王」に推戴した。…（略）…

上記の§141の冒頭の文章の主語はカタギン集団とサルジウト集団なので、これらの領袖たちが反チンギス同盟を組織した人々に見える（下線部①を参照）。ただし、カタギン、サルジウトの長の名前は秘史に一度しか登場しておらず、その後もこれらの人物に一度も触れられないので、少なくとも秘史においては実体のない人物だといえる。カタギンやサルジウトが同盟の結成における主体でないとすると、この§141の叙述はかなり奇妙なものとなっている。その理由はこの反チンギス同盟の首謀者がいったい誰なのかが曖昧模糊としている点にある。明示的には、草原の諸集団の領袖たちが自然と一致団結したかの風情である。

とはいえ、この文章をよく読んでみると、節の冒頭に見える前述のカタギンとサルジウトという2つの集団が「ドルベンとタタルに相和して」とあることに注意する必要がある（下線部②を参照）。なぜなら、

この同盟の発起人はドルベン集団とタタル集団であることが暗示されているからである。このドルベンというのは、チンギスの実質的な始祖であるボドンチャルという人物の「父」＝ドボン・メルゲンの兄ドア・ソホルを始祖とする系譜集団で、チンギスにつながる系譜についての叙述の中で最も古い集団である。一方、カタギンやサルジウトは、ボドンチャルの兄たちを始祖とする集団であり、ドルベンよりも新しい系譜集団といえる。つまり、ドルベン集団はチンギスにつながる実質的始祖集団よりひとつ上世代の集団だということになる。秘史の叙述に基づくと、この古い集団であるドルベン集団がタタル集団と対になっており、この２つの集団こそ、反チンギス同盟を結成した中核的な二大集団だと読める。

ドルベン集団が引き合いに出されている背景には、系譜としては古ければ古いほど権威があり、また、兄集団のほうを弟集団よりも優位に考える考え方があると考えられる。この考え方はこの§141 のすぐ手前の節§140 で明示的レベルにおいても示されている。すなわち、§140 においては、ブリ・ボコの振る舞いへの非難が末尾で言及されており、その非難とは、ブリ・ボコがバルタン・バアトゥルの系譜を超えてオキン・バルカクの系譜の人間と付き合ったからブリ・ボコは死に至ったというような内容になっているのである。つまりこれを敷衍すると、チンギスの実質的祖先であるボドンチャルを祖とするボルジギン集団は、カタギンやサルジウトの祖となった兄たちを押しのけて集団のリーダーとなった集団だということになる。それゆえ、カタギンやサルジウト集団が反チンギス同盟のリーダー格となっているのは、前節§140 で述べられた論理の延長として読めるのである。

ドルベン集団とタタル集団が主体となって諸集団を動員したことを受け入れた上で、彼らが動員した集団を眺めると、西はナイマンやオイラトから東はカタギン、サルジウトといった集団が列挙されている。それら諸集団の勢力分布は広範囲にわたり、自然発生的に結束したとは考えにくい。つまり、誰か特定の個人が主導して組織したと想定するのが妥当であろう。そして、この人物こそ、本論で論じてきたウゲを想定したいのである。引用文中では明示的にウゲを指示している人物はいないものの、ウゲを暗示している人物がいる。それは下線部の“タタルのアルチ”という人物である（下線部③を参照）。ただし、この“タタルのアルチ”という訳語には補足が必要である。すなわち、上記の§141 の 04:30:05 における Tatar-un Alči_Tatar-un Jalin_Buqa teri’üten については解釈の余地があるので、その旨説明しておきたい。小澤重男氏は 1986 年の時点においては、この箇所を「タタル族のアルチ・タタル族のジャリン・ブカを頭とする一団」と解釈していたが（小澤　1986：118，120）[13]、1997 年に「タタル族のアルチ、タタル族のヂャリン・ブカを頭とする一団」とするほうがモンゴル語の訳読としては素直であるとして改訳している（小澤　1997（上）：170）[14]。本論においては小澤の改訳のほうを採りたい。

この‘タタルのアルチ’という表現は秘史でここでのみ現れているのであるが、その後、タタルの下位集団名として“アルチ・タタル”の名前が現れている。この少なくとも秘史で登場している“アルチ・タタル”はおそらくウゲを頭とする集団に由来している名称だと設定しようとしているように見える。秘史においては Alči_Tatar という語は巻５§153 において 2 回登場しているが、この２つの箇所はチャガーン・タタル、ドタウト・タタル、アルカイ・タタルと並列して登場しているので、タタル集団の下位集団名として現れていることが観察される[15]。アルチ・タタルの登場している§153 においてはタタル集団が殲滅させられていることを見ると、ウゲの反チンギス闘争はここで終止符が打たれたものと想像される。

反チンギス同盟の中核がドルベン集団とタタル集団であるにも関わらず、カタギン集団やサルジウト集団という名前が主語のような形で言及されている理由については、次のような事実を指摘しておく必

要があるかもしれない。それは、彼らの居住地を考えると、チンギスーケレイト陣営がタタル集団を金朝と挟み撃ちにすると、次の段階でタタル集団のようにチンギス陣営と金朝に挟み撃ちされる可能性もあったということである。これを考えると、彼らが危機感を持ったのは当然と言えるだろう。

指摘しておくべきことは、この同盟のオーガナイザーは、チンギス陣営の系譜に対抗する系譜としてドルベン集団の系譜が持ち出されていたとしても、このドルベン集団と対で言及される、タタル集団のウゲであったという設定になっていると考えられることである。ドルベン集団の領袖であるカジウン・ベキは秘史の他の箇所にも登場する人物であるので、ウゲはチンギスに対抗しうる系譜集団としてこの集団を選び、これら古い系譜集団を結集するためにカジウン・ベキを動員し、ウゲはそれ以外の“モンゴル系諸集団”を結集することに力を傾注したということがありうる。ここで“モンゴル系諸集団”と表現したが、むしろウゲが結集した諸集団は、当時、“モンゴル系諸集団”としてどの集団が具体的に想定されていたかを示している。カタギンやサルジウト集団はドルベン集団の子どもを祖とする集団であるので、ドルベン集団のカジウン・ベキがカタギンやサルジウトの領袖たちを説得するのはウゲが説得するより効果的だったのかもしれない。

ウゲのオーガナイザーとしての仕事の中心はチンギスに関連する系譜集団以外の集団への工作にあったと考えるほうが理にかなっている。なぜなら、この反チンギス同盟には、チンギスに関連する系譜集団だけではなく、その他の集団も入っているからである。それらは、タタル以外に、ウンギラト（コンギラト）、イキレス、ナイマン、メルキト、オイラトである。メルキトはボルテ事件で敗北したのでこの同盟に入っているのは不思議ではないが、ナイマンやオイラトといった西部の地域を勢力圏とする集団が入っていることは重要である。なぜなら、これら西部諸集団を反チンギス陣営に引き入れることによって、チンギス陣営をカタギンやサルジウト集団といった東部諸集団と挟み撃ちにするという布陣が形成されるからである。これはチンギスがタタルを金朝と挟み撃ちした攻撃に対する意趣返しの攻撃となる。こうした戦略を練ることができた人物として、ウゲのような戦略家の存在は欠かせなかったのではないかと思われるのである。むろん、この反チンギス同盟の結成の背後には、3.2.2.2. で述べたような、チンギス陣営が金朝軍とタタルを挟み撃ちにする行動の持つ将来的危険性があったことを忘れてはならない。

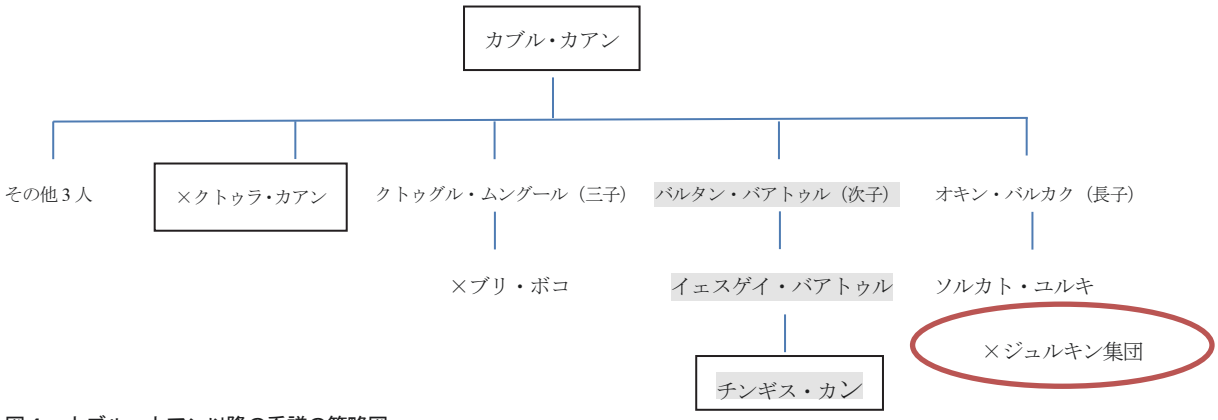

図４　カブル・カアン以降の系譜の簡略図

ただし、この反チンギス同盟が組まれた後における戦闘の叙述をたどると、タイチウド集団を殲滅するという流れになっていることが観察される。これはどういうことなのであろうか。この場合、ジュルキン

集団を殲滅した時点で（図４参照）、カブル・カアンの後継者となる系譜がほぼバルタン・バアトゥルーイェスゲイーチンギスの系譜に定まったことを指摘したい。カアン位を狙えるこの系譜以外の系譜としては、クトゥラ・カアンの前任者アムバガイ・カアンを祖とするタイチウド集団のみとなった（図５参照）[16]。

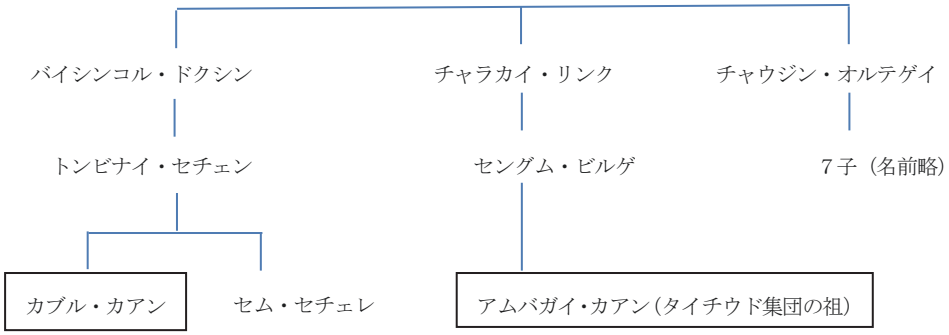

図５：秘史におけるアムバガイ・カアンとカブル・カアンとの系譜関係

すなわち、この反チンギス同盟が結ばれた後に、タイチウド集団の殲滅が語られていく流れは、カブル・カアン→アムバガイ・カアン→クトゥラ・カアンの次の王位継承ラインを一本化していくプロセスとして読める。イェスゲイ時代に既に機能不全に陥っていたクトゥラは既に力がなかったものの－さらにクトゥラの息子アルタンは巻３§123 ですでにチンギスを担いでカアンとなしていた－、カブル・カアンのバルタン・バアトゥル以外の子供の系譜は、ジュルキン集団を殲滅し、後始末的にブリ・ボコを抹殺することで除外されたので（図４の人物名の手前に付された×印を参照）、チンギスにとって抹殺すべきなのはアムバガイ・カアンの系譜であるタイチウド集団のみになったということである。それゆえ、ジュルキン集団、ブリ・ボコ抹殺の後に、チンギスの攻撃の標的がアムバガイの系譜であるタイチウド集団に絞られていくのは必然であったといえる。

この観点から見ると、タイチウド集団の領袖タルクタイ・キリルトゥグやその息子たちがこの反チンギス同盟のリーダーになってもおかしくはなかったということが理解される。しかし、彼らにはその実力が備わっていなかった。この反チンギス同盟が瓦解した後、タルクタイ・キリルトゥグが配下にあったニチュグウト・バアリン集団のシルグエト老人－ナヤア父子に捕らわれた経緯における叙述を見ると（巻５§149）、この人物が物事を仕切る実力があったとはとうてい思われないからである。この点についてはとくに詳細な議論を要さないと思われるので割愛したい。タイチウド集団の領袖たちの実力が不足していたため、彼らタイチウド集団が担いだのがジャダラン集団のジャムカであった。ジャダラン集団とは、チンギスの系譜の実質の祖であるボドンチャルの愛人の出身集団ウリヤンカイ（厳密にはアダンカ・ウリヤンカイ）の系譜であったものの、ウリヤンカイはそもそもモンゴル系諸集団より前の時代から先住していた民であり（巻１§9）、ドルベン集団よりも古い集団であった。

以上のように、「内」に対しては、カアンになれる系譜の一元化への始まりがあり、カアンを輩出する集団はバルタンーイェスゲイーチンギスというラインの系譜が独占する（図４参照）。「外」に対しては、挟み撃ちを絶対的に阻止するための“防衛”戦争―明示的には勢力拡張戦争－をしていく路線が確定した。

以上の議論から、ウゲとチンギスでは、「外」だけでなく、「内」への対応の方針が明らかに異なってい

た。これをまとめると表３のようになる。

表３　ウゲとチンギスにおける「外」と「内」への対応の違い

	「外」に対する対応	「内」に対する対応
ウゲ	勢力均衡 （ヒエラルキー不在）	カアンの不在：実力者がリーダーシップを取る。 （ヒエラルキー不在）
チンギス	金朝とタタル集団を挟み撃ちすることを発端とする、チンギス陣営の他集団への優越 （ヒエラルキーの確立）	カアンを立て、その位をバルタン－イェスゲイ－チンギスの系譜が独占する。 （ヒエラルキーの確立）

４．結論―巻４§141 における反チンギス同盟の非明示的意味―

以上、イェスゲイ時代とチンギス時代におけるウゲの行動の軌跡を考察してきた。まず、イェスゲイ時代においてウゲは、イェスゲイにケレイトの王罕とのアンダ（盟友）関係の構築を通して勢力均衡を図らせ、「内」においてはレームダックのクトゥラ政権に代わる新カアン位に就かせないことで、諸集団間及び集団内部の均衡に力を傾注させていた。これに対して、チンギス時代においては、イェスゲイの死後にウゲとチンギスの関係性は微妙なものとなり、最終的に段階を経て対立していったことを論じた。チンギスは「外」集団との均衡を壊す、金朝とタタル集団を挟み撃ちにするという勢力均衡を破壊するような軍事行動をとったり、「内」に対してはカアン位に就いたりといった、イェスゲイが実行に移さなかったことを悉くやってしまった。

ウゲは「外」にも「内」にも、勢力均衡を旨とする考え方をしていた。勢力均衡は、怠惰な事なかれ主義ではなく、その状態を維持するには、ミクロな視点では敵であっても、マクロな視点では、その敵集団を根絶やしにすることなく敢えて温存させる必要があるという考え方である。ウゲが登場して以降、イェスゲイが対タタル戦に参戦したという叙述がないことは重要である。少なくとも、ウゲの勢力均衡論の利点をイェスゲイは受け入れていたので、イェスゲイの死まで約１０年の間、イェスゲイ周辺では草原の秩序が平和裏に保たれていたと考えることができる。

しかし、イェスゲイの死後、イェスゲイ傘下にいた人々が次々にタイチウド集団の傘下に流れ、ゆるやかにジャムカ陣営に吸収されるという事態に至った。結果だけを見ると、ウゲの戦略の綻びによってイェスゲイが横死したと言えるので、ウゲはイェスゲイのブレーンとしての失敗の責任が問われる事態となった。そこで、ウゲはボルテをメルキト集団に奪わせるという奇策を考え付き、チンギスに実行させた。ボルテ事件を引き起こすことにより、ウゲは王罕やジャムカを事件に巻き込むことに成功し、チンギスはジャムカに奪われたイェスゲイ遺民と再び合流することができた。

とはいえ、チンギスが金朝とタタル集団を挟み撃ちにする行動を取ってしまったことを見ても、カアンになったことを見ても、チンギスがウゲの考え方を受容することはなかった。何よりも、彼ら二人の決裂を決定的なものにしたのは、チンギスがタタル集団を金朝と挟み撃ちにする攻撃であった。ウゲは、チンギスのその行為の持つ計りしえない負の影響力を押しとどめようと、草原の諸集団の領袖たちに反チンギス陣営同盟を組ませた。そして、そのリーダーとしてジャムカを据えた。チンギス陣営を東西（+北）から挟み撃ちする戦法は、チンギスが金朝と謀ってタタル集団を挟み撃ちにした軍事行動への意趣返し

としての意味もあった。しかしジャムカはこの期待に応えることはなく、最終的に自分をカンに据えてくれた諸集団を略奪するような行動に出てしまう。

皮肉なことに、ウゲと同じ名前すなわちテムジンという名前を分与されたにも関わらず、チンギスはウゲの勢力均衡という考え方をイェスゲイのように共有することはなかった。秘史で記されたチンギスの行為は、“勝つこと”がすべてであったと解することができる。一方のウゲの依拠する勢力均衡論とは“負けないこと”を意味していた。“勝つこと”と“負けないこと”は同義ではない。“勝つこと”は一回の勝利ではなく、勝ち続けることが必要である。これに対して、“負けないこと”は闘わずに踏み留まろうとする現状維持の精神である。この二つの道が交差することは難しかったといえる。そして、いったんウゲとチンギスの戦いにおいてチンギスが勝利した以上、チンギスの系譜集団においてカアンになれるものはチンギスの子孫だけとなり、かつ、モンゴル高原は勢力が均衡している遊牧諸集団が割拠する空間ではなく、チンギス陣営による統一政権下におかれた空間へと変わっていくことになった。

ダラン・バルジュトでの戦い（いわゆる十三翼の戦い）以降に樹立されたこの反チンギス同盟は、明示的には、チンギスに対抗する「不届きな」反対勢力というように見える。ダラン・バルジュトの戦い以降にチンギスが金の支配下に入った非明示的内容を考えると、この反チンギス同盟に対する評価は、非明示的には、チンギス陣営はいわば外国（この場合、金朝を指す）の傀儡政権であるのに対して、彼ら反チンギス同盟は古きモンゴルを守るための義勇軍的同盟のようなものだったことになる。ただし、この同盟のリーダーに据えられたジャムカという人物がいかなる思惑を持っていたのかは掴みづらい[17]。これについてはまた改めて考察することにしたい。

ジャムカの問題をひとまず棚上げしたとしても、ウゲがイェスゲイの戦略アドヴァイザーとして勢力均衡の立場から活躍していたという本論の仮説は、以上の考察で検証されたといえよう。とくに、この仮説に基づくと、１）秘史に描かれたウゲを連れてきた後のイェスゲイの政治的・社会的行動の意味がよく読み取れること、２）そして最終的にウゲの思惑がデイ・セチェンの介入により失敗しイェスゲイが毒殺されてしまう事件の責任を取る形でボルテ事件がウゲによって画策された流れがよく理解できること、３）チンギスがジャムカとの戦いに敗れて金朝の支配下に入った後、金朝軍とタタル集団を挟み撃ちにした行動をウゲがモンゴル諸集団の均衡を破る行為とみなしてチンギスと決定的に決裂したこと、そして、４）ジュルキン集団がチンギスによって殲滅させられた後、チンギス－王罕陣営を除く多くの諸集団がジャムカをカンとして擁立した背景には勢力均衡論ゆえのウゲの暗躍があった可能性がよく理解されること、を強調しておきたい。そしてこの４つの事柄が互いに有機的に関連していることを示すことができたので、当該仮説は妥当なものであると結論付ける。

【補遺】

秘史の§141 において叙述されている明示的内容が史実とかなり異なることについては、吉田順一氏がラシード・ウッディーンの『集史』、『聖武親征録』、『元史』の三つの史料（これら３つの史料は『集史』等三書と称されているので、以下この表現を用いる）と秘史の内容とを比較考察する中で指摘している（吉田　2009：107－117）【補遺の注１】。ただし、本論では§141 に焦点を当ててウゲの活躍について論じたが、吉田氏は当該論文で§141 を含む§141～§149 をクイテンの戦いについての一連の流れとして取り扱っている。そのうえで、氏は秘史のクイテンの戦いに関連する出来事について、『集史』等三書の

述べる内容は秘史の述べるそれとあまりに隔たりが大きいことに驚かざるを得ないと言う（115 頁）。以下においては、氏の論考と本論の考察とは矛盾するものではないことを、まずは§141 にのみ着目して述べることにしたい。

§141 の明示的内容において史実と異なっている点の一つは、秘史では酉の年（1201 年）に、ナイマン、メルキト、オイラトが反チンギス同盟に加わってジャムカをグル＝カンに推戴したという内容である。氏によると、史実としては、1201 年にジャムカをグル＝カンと担いだのはオンギラト、イキレス、コロラス、ドゥルベン、タタル、カタギン、サルジウトの 7 部のみであり、ジャムカはモンゴル高原東部地域の反テムジン・オン＝カン諸勢力を代表するに過ぎないものであった（113 頁）。ところが、秘史においてジャムカはナイマン、メルキト、オイラトも加わった、モンゴル高原の広い範囲の遊牧諸部の代表に推戴されたような誤解を与える叙述となっているというのである（同頁）。

§141 における明示的内容の中で『集史』等三書における史実と異なるもう一つの点は、一つ目とも連動する事柄であるが、§141 で言及されている上記の 7 部以外の、ナイマン、メルキト、オイラトなども含む、反テムジン・オン＝カンの諸部が顔をそろえたのは、酉の年（1201 年）ではなく翌年の戌の年（1202 年）のことだという点である。つまり、秘史においては別の年に行なわれた事柄がひとつの年に行なわれたように叙述されているということである。ちなみに、補足として述べておくと、『集史』等三書においてナイマン、メルキト、オイラトも東部の諸部に加わって反チンギス同盟に加わった際には、ジャムカがカンに推戴されたということは述べられていない（113 頁）。

モンゴル高原の東部地域の反テムジン・オン＝カン諸勢力を代表するに過ぎなかったジャムカをあたかもゴビ以北のモンゴル高原のほぼ全域の諸部の代表とした理由は、拙論において考察したように（藤井 2011b）、秘史の「作者」がジャムカの死までジャムカに対する特別な思い入れを持っていたことと関連しているものと考えられる。つまり、ジャムカをチンギスと対立する好敵手としてモンゴル高原の東部地域のみの代表とすることは相応しいものではないと考えたということである。ただし、秘史にも独特の誠実性が観察される。それは、史実と一致させて、ジャムカの推戴年を 1201 年としたことである。それゆえ、上記の二つの矛盾点はジャムカに対する「作者」の特別な思い入れに由来するもので、英雄叙事詩的な観点から見ると矛盾はない。

次に、§141 だけでなくそれ以外も含む秘史と『集史』等三書との間の差異について、吉田氏はタイチウト集団の扱いが異なることを指摘していることを取り上げたい（115 頁）。氏はクイテンの戦いにタイチウトが参加していたかどうかは不明とするものの（110 頁の（E）の（ｆ）に疑問の意を表す？が付いていることを参照）【補遺の注２】、秘史では、①クイテンの戦い→②タイチウド撃破→③タイチウド部衆の来属という流れになっている（ただし①②③の番号とその内容は筆者が 115 頁の内容をわかりやすくするために整理したものである）。ところが、『集史』等三書では逆順の③→②→①である。これについても、秘史の「作者」をニチュウグウト・バアリン集団のナヤアという仮説を提起した拙論に基づくと（藤井　2013：55－68）、矛盾はない。なぜなら、ナヤアはタイチウトに属していたため、『集史』等三書のようにタイチウトのチンギスへの来属をタイチウトの撃破よりも前の出来事として叙述していたら、ナヤアは主君に最後まで忠義を尽くさなかった裏切り者ということになるからである。主君への忠義は英雄叙事詩における理念として重要視されていることを強調しておかねばならない。それゆえ、秘史のように、タイチウトが滅亡した後にナヤアの来属を配置するのは英雄叙事詩的な発想として理解できるのである。

ただ補足すべきことは、拙論において論じたように（藤井　2011b : 48－49）、秘史において明示的に叙述されているナヤアのチンギスへの来属の時期は虚偽であり、非明示的にはボルテ事件の後、巻 3 § 119 の段階で、チンギスとジャムカが分かれたときにいち早くチンギスのもとへタイチウド集団のベスト集団の宿営地に残されていた幼児ココチュと共に合流している。

これ以外に、本論との関連で読む場合、吉田氏の論点で重要なことは、秘史の「作者」（吉田氏は「編者」としている）がクイテンの戦いに持たせようとしていた主題である。氏は、『秘史』におけるクイテンの戦いの叙述と対比させ、『集史』等三書に基づいたクイテンの戦いを（A）～（E）の５つに分節しているが【補遺の注２】、吉田氏はチンギスが（C）と（D）の戦いの間にタタルをダラン＝ネムルゲスの戦いにおいて撃破し、（D）と（E）の戦いの間の時期にタタルをウルクイ＝シルゲルジトにおいて撃破した内容があることを指摘し（113 頁）、この指摘によって秘史のクイテンの戦いに関する叙述には、チンギスのタタル撃破の内容が欠落していることを示している。この事実に基づいて、氏は秘史編者の意図したクイテンの戦いの主題を、テムジンあるいはテムジンとオン＝カンのモンゴル高原東部地域の諸部に対する覇権の確立であったとし、その覇権の確立の過程をテムジンのタタル討滅のことだけを外して述べることにあったと考察している（114 頁，ただし下線部筆者）。秘史においてクイテンの戦いの叙述でタタル討滅のことだけを外して述べなければならなかった理由はどこにあったのかを考える場合、本論で展開したテムジン・ウゲの隠された動きを秘史においては非明示的内容として埋め込んでいることと関連していると見る。つまり、タタル出身のテムジン・ウゲが隠れた反チンギス連盟のお膳立てをした人物として存在していたという仮説に基づけば、このクイテンの戦いの叙述のなかにタタルの敗北を入れなかったことは当然である。重要なので繰り返しておくと、§ 141 における反チンギス同盟の結成にはタタル出身のテムジン・ウゲが関わっていたということが秘史の非明示的な主題であったのだから、秘史の「作者」が § 141～ § 149 の秘史のクイテンの戦いにタタル討滅の内容を混入させなかったのは当然なのである。

むろん、明示的な理由としては、秘史の随所で叙述されている、チンギスのタタルに対する怨念がタタルを特別な集団として意識させ、その結果、タタル討伐を内容として独立させたという見方が成り立つかもしれない。しかし、非明示的な理由としては、本論のウゲの存在があったという仮説を重視したい。それゆえ、吉田氏の指摘されている、秘史におけるタイチウド関連の出来事の配置やタタル討滅の排除という秘史に特徴的な語りは、本論で展開した非明示的内容にむしろ符合していると言える。

以上、この補遺においては、吉田氏の指摘している、（１）史実としては § 141 におけるジャムカをカンとして推戴した諸部にナイマン、メルキト、オイラトが入っていなかったこと、（２）タイチウトの来属→タイチウト撃破→クイテンの戦いという史実が秘史で逆順になっていること、そして（３）秘史のクイテンの戦いにはタタル討滅のことだけを外して叙述されていることが、本論やこれまでの拙論で論じてきた内容と齟齬はないことを確認したことになる。

【補遺の注１】この補遺で筆者が参照にしたのは、2009 年に早稲田大学モンゴル研究所の紀要で発表された吉田論文であるが、同論文が掲載された同号における氏の別論文「『モンゴル史』研究」によると、このクイテンの戦いに関する論文の初出は、ウランバートルで 1987 年に開催された第５回国際モンゴル学者会議に英文で提出したものであるという（91 頁）。つまり、当該論文の内容は 2009 年よりも 20 年以上も前に発表されていたものであることを断っておきたい。

【補遺の注２】吉田順一氏は『集史』等三書におけるクイテンの戦いを（A）～（E）に分節して示している（110 頁）。なお、｛　｝中の小文字のアルファベット（a）～（r）は秘史におけるクイテンの戦いとの対比で該当している箇所となる。(a）～（r）についても、（A）～（E）を引用した後に、引用しておく。

(A)テムジンのところへのタイチウト部所属の人びとの来属(『集史』では 1194 年以前の出来事とされている)｛(p)，(r)｝

(B）テムジンとオン＝カンのタイチウト撃破（『集史』では 1200 年の出来事とされている）｛(n)，(q)｝

(C）カタギン等の 5 部のアルクイ泉における誓いとブユル（Buyur）湖での戦い（『集史』では 1200 年の出来事とされている）｛(b)，(c)，(g)，(i)｝

(D）オンギラト（Onggirad）等 7 部によるジャムカのグル＝カンへの推戴とイディ＝クルカン（Idi quruqan）での戦い（『集史』では 1201 年の出来事とされている）｛(b)，(c)，(d)，(h)，(j)｝

(E）クイテンの戦い（『集史』等三書すべて 1202 年の出来事とする）｛(a)，(b)，(e)，(f)？，(k)，(l)｝

次に、『秘史』に述べられている吉田氏によるクイテンの戦いの内容（a）～（r）である（107 - 108 頁）。

(a)酉の年

(b)カタギン（Qatagin)、サルジウト（Salji'ud)、ドゥルベン（Dörben)、タタル（Tatar），

(c)オンギラト（Onggirad）

(d）イキレス（Ikires)、コロラス（Qorolas）

(e）ナイマン（Naiman)、メルキト（Merkid)、オイラト（Oyirad）

(f）タイチウト（Tayiči'ud）の者たちが、

(g）アルクイ（Arqui）泉に集まり、

(h）ジャダラン（Jadaran）のジャムカ（Jamuqa）をカ（ン）〔qa(n)〕に推戴しようと、

(i）馬を殺して誓い、

(j）ケン（Ken）川がエルグネ（Ergüne）川に注ぐあたりに移動してから、グル＝カ（ン）〔Gür qa(n)〕に推戴し、テムジンとオン＝カンに対して出撃してきたが、コロラスのコリダイ（Qoridai）の通報を受けてテムジンはオン＝カンに事態を知らせた。

(k）テムジンとオン＝カンは出撃し、クイテンにおいて対陣したとき、ナイマンのブイルク＝カン（Buyiruq qan）とオイラトのクドカ＝ベキ（Quduqa beki）がジャダ（ǰada）の術を用いたが失敗し、

(l）ジャムカは自分をカンに推戴した民を奪い捉えて逃走し、

(m）かれをオン＝カンが追跡した。

(n）テムジンは、タイチウトの者たちを追跡し、オナン（Onan）川のあたりのフレウト＝トラス（Hüle'üd turas）において（？）対戦し、タイチウトの者たちと対峙して宿ったところ、彼らは夜の間に散り散りに逃げた。

(o）テムジンはこの戦いで負傷し、ジェルメ（Jelme）の手当を受けた。

(p）翌日、スルドス（Suldus）のソルカン＝シラ（Sorqan šira）とカダアン（Qada'an)、ベスト（Besüd）のジェベ（Jebe）が来属した。

(q）テムジンはそこに、アウチュ＝バアトル（A'uču ba'atur)、コドン＝ウルチャン（Qodun Örčen)、クドウダル（Qudu'udar）らのタイチウトを殲滅し、その ulus irgen を獲得した。

(r）ニチュグト＝バアリン（Ničügüd Ba'arin）のシルグエト（Sirgü'etü）と息子のアラク（Alaq）とナヤア（Naya'a）は、自らのノヤンであるタイチウトのタルクタイ＝キリルトク（Tarqutai kiriltuq）を捕らえたが解放

し、それからテムジンのところに来属した。

引用文献

【日本語】

小澤重男（1986）『元朝秘史全釈』（下） 風間書房

小沢重男（1997）『元朝秘史』上・下巻，岩波文庫

栗林均・确精扎布編（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第 4 号 東北大学

藤井麻湖〔＝藤井真湖〕(2001)『伝承の喪失と構造分析の行方－モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』日本エディタースクール出版部

藤井麻湖〔＝藤井真湖〕(2003)『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社

藤井真湖（2010）「『元朝秘史』第 53 節～第 68 節の有機的解釈の試み―“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに―」『言語文化学会論集』第 34 号，167-179 頁

藤井真湖（2011a）『元朝秘史』におけるベクテル、ベルクテイ、“ベルグテイの母”の考察－ベルグテイの母の出身仮説をもとに―」『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』第 6 号 21－41 頁

藤井真湖（2011b）『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図－巻 3 第 110 節～巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察―」『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』第 7 号 45－66 頁

藤井真湖（2013）『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩”的研究―原題に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ―」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』第 15 号 43－70 頁

藤井真湖（2014a）「『元朝秘史』における anda 概念－王罕ジャムカ - チンギスの非明示的な三者関係を基に－」『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』第 10 号 47－71 頁

藤井真湖（2014b）「『元朝秘史』におけるボルテ事件―繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 6 号 39-54 頁

藤井真湖（2015）「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件―クトゥラ関与の仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 7 号 11-32 頁

藤井真湖（2016）「『元朝秘史』におけるジュルキン集団を殲滅する非明示的論理―ブリ･ボコがチンギスの味方であったという仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科編』第 8 号 1－21 頁

藤井真湖（2018）「『元朝秘史』におけるホエルン夫人の隠された再婚―繰り返された再婚とその破綻の仮説―」『愛知淑徳大学論集－交流文化学部扁』第 8 号 1-22 頁

藤井真湖（2019）「『元朝秘史』におけるコアクチン老婆―ブルカン山へのテムジンの逃走に果たしたウリヤンカイ一家の役割」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 11 号 43-64 頁

藤井真湖（2020）「『元朝秘史』におけるカアタイ・ダルマラ―ホエルンとチレドの実子であったという仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 12 号 29-54 頁

藤井真湖（2021）「『元朝秘史』におけるデイ・セチェンーデイ・セチェンがイェスゲイ・バアトルの死に関与していたという仮説に基づいて」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 13 号　11-27 頁

松田孝一（2015）「西遼と金の対立とチンギス・カンの勃興」『13－14 世紀モンゴル史研究』第 1 号，大阪国際大学 51 - 65 頁

村上正二（1970）『モンゴル秘史 1　チンギス・カン物語』東洋文庫　平凡社

ロラン・バルト（1979〔原文は 1977〕）「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』（花輪光訳）

吉田順一（2009）「『モンゴル秘史』」研究」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』第５号　79－105 頁

吉田順一（2009）「クイテンの戦いの実像」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』第５号　107－117 頁

【中国語】

拉施特／余・周『史集』（1983）：拉施特主编 余大均・周建奇≪史集≫第一卷第一分冊（1－1）・第二分冊（１－２），商务印书馆

【英語】

Ratchnevsky，Paul(1991)Genghis Khan:His Life and Legacy,Translated and Edeted by Thomas Nivison Haining, Blackwell Publishing

Rachewiltz=Igor de Rachewiltz（2004）The *Secret History of the Mongols*:A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth century, BRILL, Volume one

【モンゴル語】

Дамдинсүрэн,Ц.（1957）Монголын Нууц Товчоо（Хоёр дахь Удаагийн Хэвлэл），Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар

注釈

[1] ただし、後述するように、実際には捕虜として連れてこられたというような叙述はなく、非常に曖昧模糊と語られている。また、この人物は『集史』ではイェスゲイに殺害されたことになっている（拉施特／余・周『史集』1－2　1983：75）。テムジン・ウゲの生存についてだけでなく、本論で大きく取り上げることになるボルテ事件もまた史実における事実であったかどうかについて疑問視されていることも触れておく。これについては例えば（村上　1970：196）を参照。

[2] 筆者はロラン=バルトの構造分析を参照枠組みとしてモンゴル英雄叙事詩の研究をおこなってきた（藤井　2001, 2003）。

[3] むろん、自分自身の正妻をあえて敵に略奪させるということはありえるのかという疑問も生じる。しかし、これに関していえば、明示的レベルにおいても（巻 2 § 99）、チンギスが換え馬を自分にとっておかなければ、ボルテ夫人は馬に乗って逃げることができ、すなわち、メルキトに襲われずにすんだということを指摘しなければならないであろう。

[4] ブリ・ボコ事件には別の非明示的意味もある。それは巻４§ 130 の宴会がホエルンとムンリクの婚姻の祝宴だったことである（藤井　2018）。

[5] § 129 は、チンギス陣営とジャムカ陣営の間における戦闘が叙述されている部分であるが、ここでチンギスはジャムカに「動かされて gödölgekde=jü」と叙述されており、この戦いに敗戦を喫したことが暗示されている（巻 2 § 99）。

[6] § 130 の冒頭には、「こうして、ジャムカをそこから帰らせてから tende Jamqa-i tende-če qari'ul=u=at」とあり、チンギス陣営があたかもジャムカ陣営よりも優位に立っているかのような使役表現が用いられている。

[7] チンギス陣営に、ウルウド集団のジュルチェデイ、マングト集団のクイルダル、そしてムンリク・エチゲがジャムカのもとから離れて合流している。
[8] ダラン・バルジュトの戦いの後にチンギスが金朝の保護下に入ったという見解は、別の観点から Ratchnevsky も採っている見解である（Ratchnevsky　1991：50）。
[9] ウリヤンハイのジャルチウダイ老のほか妻のコアクチン、息子のジェルメの三人がチンギスにいかに利用されたかについては拙論で詳述したので、そちらを参考にされたい（藤井　2019）。
[10]実は、チンギス陣営は、ボルテ事件の最中に、チンギスの実母ホエルンがメルキト集団のチレドと婚姻していた時代にチレドとの間にもうけていたカアタイ・ダルマラという実子を取り戻している（藤井 2020）。これもまたウゲの戦略がもたらした成果であったといえる。
[11] 具体的には、1 つ目は「そこでイェスゲイ・バアトルがタタルのテムジン・ウゲ、コリ・ブカを筆頭とするタタルを略奪して戻ってくると」（原文は tende Yisügei_ba’atur Tatar-un Temüǰin_Üge Qori_Buqa teri’üten[01:40:05],Tatar-i dawuli=ǰu ire=esü 〔01:40:06〕）であり、2 つ目は「タタルのテムジン・ウゲを連れてきたところに」（原文は Tatar-un Temüǰin_Üge-yi a[b]čira=qsan- ṭur〔01:40:09〕）である。
[12] ジャムカの§118 における「謎の」言葉とは、「山に接して宿営しよう、我らの馬飼いたちの厩舎に至ろう。渓谷に接して宿営しよう、我らの羊飼いや仔羊飼いの喉に至ろう」という言葉である。この言葉の真意については anda 概念を検討した拙論において論じたように、この言葉によってジャムカが彼らのアンダ関係の期限について尋ねたのかどうかをチンギスが測りかねたという場面であった（藤井 2014a：59）。このとき、ボルテがジャムカ盟友は飽きやすい人間で自分たちに飽く時になり、含むところのある言葉であるので宿営せずそのまま進むことを提案する。チンギスはこのボルテの言に従った行動を採り、このボルテの言により、合流したチンギス陣営とジャムカ陣営が再度分かれることになる。
[13] Rachewiltz もまた the Tatar led by Jalin Buqa of the Alči Tatar というように解釈しているだけでなく、この箇所を問題にした形跡がない（Rachewiltz　2004：62）。
[14] 小澤氏は当該箇所で、この改訳はすでにモンゴル国のダムディンスレン氏やツェレンソドノム氏、さらに内蒙古の花賽氏、都嘎尔札布氏が採っていた訳語であることに言及している。ダムディンスレンは確かにキリル文字版の第二版によると、Алч,Жали буха тэргүүтэй татаар нар と訳している（Дамдинсүрэн　1957：86）。その他の事例については各文献を参考にできなかったものの、小澤氏の改訳のほうの解釈を採る論者がそれなりにいることを示すために、ここに言及しておく。
[15] ただし、§153 の最初の集団名が列挙される際に、Dutaut には Tatar が付されていないことが観察される。これが誤植なのかどうかは判断がつかない。なお、秘史においてはタタルの下位集団として４つの集団が挙げられているが、『集史』においては６つの集団が挙げられており（拉施特／余・周『史集』1－1　1983：167）、そのうち秘史と明らかに対応していると考えられるのは、アルチ・タタルとチャガーン・タタルである。
[16]　図５は秘史の巻１§47 に基づくものであるが、図５の中にはチャラカイ・リンクが兄嫁との間に設けた子ベステイを含んでいない。
[17] 松田孝一氏は 12 世紀後半におけるモンゴル高原における諸集団をめぐる国際情勢として金朝だけでなく西遼（カラ・キタイ）を視野に入れる必要があることを論じられている。こうした国際情勢は、この議論の中で外すことがのできない論点となる。氏はジャムカの称号が西遼の首長の称号「グル・カン」と同じであることから、秘史の§141 で述べられているような反チンギス連合の背後には西遼との関係が示唆されている可能性に言及されている（松田　2015：60）。それ以外にも、そもそもジャムカの出自である Jajirad 族は耶律大石が 1124 年にモンゴル高原で結集した 18 部族の１つ「茶赤剌（cha-chi-ra<＊Jajirad）」であり、さらに金攻撃のために 1134 年に西方から派遣した７万人の軍隊の主要将軍の所属集団の１つ「茶赤剌」であったことを指摘されている（同頁）。